



平和資料館 草の家 だより

No. 88

2005年10月発行



草と草の根の連帯をあらわす
草の家のシンボルマーク

〒780-0861 高知市升形 9-11 Tel 088-875-1275 Fax 088-821-0586
E-mail: GRH@ma1.seikyō.ne.jp <http://ha1.seikyō.ne.jp/home/Shigeo.Nishimori>

騙されない責任の重み

気付いた時にはもう遅い・・・

2002年3月、米英のイラク侵略が始まって間もなく、韓国の進歩的な新聞「ハンギョレ」に載せられたコラム「可愛そうだ。米軍の兵士たち」の一部である。選挙結果が明らかになった朝、この文章が思い浮かんできた。

偶然であろうが9月11日は、21世紀の歴史を変えてしまった「9・11同時多発テロ」の3周期でもあった。選挙結果の報道であまり注目されなかったが、9月12日の朝のニュースでは9・11テロ犠牲者遺族の中で2人のインタビューが流れた。私には今回の選挙結果と結び付いて、まさにこの国の未来を暗視するような印象の深い場面であった。

一人の遺族は追悼式で、イラクから米軍を撤退させることを強く訴えた。もう一人の遺族は、“テロとの戦い”を掲げた侵略戦争が始まって以来、アメリカ社会が以前より不安になって怖いので旅行にも行けなくなったとつぶやいた。私は独り言を言った。「気付いた時にはもう遅い・・・」

民主主義の変質：“刺客”主演の“小泉劇場”

民主主義社会の根本となる選挙。有権者一人ひとりの未来を決める政策。その政策に対する社会的な議論の場となるべき選挙の空間は、いわゆる“刺客”を主演俳優に急遽作られた“小泉劇場”の“郵政民営化”というバラエティショーへ変質してしまった。

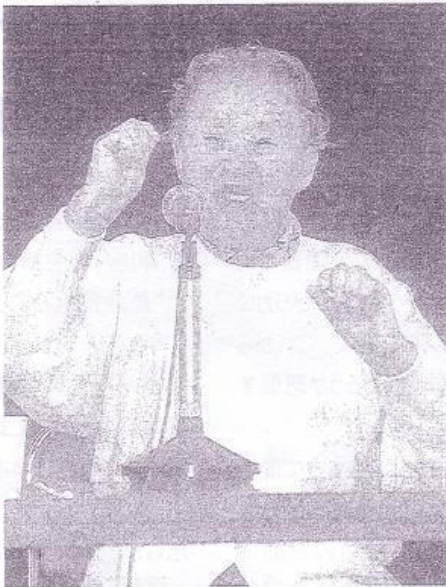
選挙運動の報道を見ていたら、今回の選挙では郵政民営化に反対する自民党議員と“刺客”だけが映っていた。本質的にはそんなに変わりのない二つの集団。むしろ、郵政民営化に反対する候補たちが、小泉政治に体を張って抵抗する“志士”のように錯覚されるくらいであった。無批判・無思考のマスコミは政治人ではなく芸能人になった“小泉チルドレン”を今日も追っかけ続けている。

郵政民営化の裏では：憲法改悪の本音

しかし、選挙が終わってから郵政民営化の裏に隠された彼らの本音が明らかになった。自民党は選挙から一夜明けた9月12日、改憲のための「憲法調査会」を常設委員会にしようと打ち出した。憲法改悪のための国民投票法案を始め、改憲論議を本格化しようとする。郵政民営化の裏には、彼らが本当に狙った憲法改悪、教育基本法改悪の本音が隠されていたのだ。

特別国会で郵政民営化法案が成立する過程を見ると、この国の国会で民主主義が死んでしまう危険性を感じる。反対の声を無視する、もっと怖いのは反対の意見を持っていても声を出せなくなることだ。「独裁」と言っても過言ではない。

旧日本軍慰安婦・朴さん高知市で証言



身ぶりによってもう言葉を交え、連れ去られた当時のこと証言する朴三善さん (高知市の真名文化ホール)

恥辱と怒りでいっぱい

「家の中は、恥ずかしさと、怒りでいっぱいでした」。旧日本軍慰安婦の韓国人女性、朴三善(パク・オクソン)さん(80)は韓国・京畿道在住が二十三日、全国同時企画「歴史を忘れない記憶」のため来高。高知市の真名文化ホールで、約三百人の聴衆を前に講演した(学生はひんむら「サラダ」の主催)。朴さんは流れるように「恨(ハン)を吐き出すかのうように約四年間の慰安所での体験などを語った。証言要旨を紹介する。

インド洋派兵自衛隊の駐留延長を決めた与党は、相次いで教育基本法の改悪や共謀罪の成立など、戦争する国に必要な悪法をつくろうとしている。

戦争する国への動きを象徴するできごとの一つは、小泉首相の靖国への執着である。戦争に対する反省もなく、憲法を無視し、アジアとの関係を顧慮しない小泉首相はまた靖国へ行った。憲法改悪と靖国参拝の関連性について高橋哲哉さんはつぎのように指摘している。

「自衛隊を自衛軍に変えたい自民党は、戦死者を英霊として顕彰する精神的装置を再び必要としているのだ。」(朝日新聞、10月18日、31面)

騙されたと気付いた時にはもう遅い。これから正念場を迎える闘いの前に、再び騙されない責任の重みを感じる。

事務局長 金英丸

慶尚南道の密陽という所に住んでいた十七歳のときでした。あるとき、向かいの家の友達と水くみに行き、その帰りに二人の日本人が「徳子」と声を掛けられました。あちこいで女性が連れ去られる話を聞いていたので、逃げようと思ったのですが戻さずかまれました。「家へ帰る」と叫び呼びましたが、力尽きて連れて行かれました。

見るも、トラックがあり、(集合の)中で同じ年の女の子が二十人くらい泣いていました。トラックにはおぼろげに走っている、翌朝、にぎやかな、泣いて、食べませんでした。

トラックは軍の貨物車に一連閉鎖し、中国と

裸で検査／部屋は2畳

旧日本の国境まで連れられて行かれました。大きな学校の運動場みたいな所で二階建てのれんがの建物がありませんでした。廊下の中国語がずっと並んでいました。「ここへ入れ」と言われ、泣き続けました。日本語ができたので「姉の子に何をやるのか」と言われ、「何かやる」と言われ、米を待つてきました。「日本人が待っていますか」と言われ、「はい」と言われ、「身体検査をする」と言われ一列に並び、一人ずつ裸で部屋に入りました。寒い、恥ずかしい、怒りでいっぱいでした。

慰安所の部屋は畳が二枚、窓には布。入り口には女性たちの日本名を書いた紙が張られました。夜は掃箒がやってくると二階まで掃箒をさせられました。

一九四五年の八月たつたかと思いません。突然、外平和な時代をへって布を失くすと、真っ赤のソ連軍がやって来て

中国語がずっと並んでいました。中国語がずっと並んでいました。中国語がずっと並んでいました。中国語がずっと並んでいました。